



GOOD NEWS とぎのこえ

War Cry

5月号

福音版
2023
May
No.2851

二〇二三年 五月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

心にかけていて くださる方

本村 大輔



「主はこの母親を見て、

憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

「大丈夫だ」「みんながんばっているんだから、お前もがんばれ」というような言葉よりも(それが、そう言ってくれる人からの精一杯の励ましだということはわかりませんが)、じつと耳を傾けて、悩む思いを受け止めて、時に必要な示唆を与えて、私を信じて見守ってくれた人の思いは、いつまでも私を支え続けるものになっていきます。そして、その時も一緒に寄り添ってくださっていた神様の温かさを後になって知りました。

「人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、『大預言者が我々の間に現れた』』と言いつつ、また、『神はその民を心にかけてくださった』』と言った。(ルカによる福音書7章16節)

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

「大丈夫だ」「みんながんばっているんだから、お前もがんばれ」というような言葉よりも(それが、そう言ってくれる人からの精一杯の励ましだということとはわかりませんが)、じつと耳を傾けて、悩む思いを受け止めて、時に必要な示唆を与えて、私を信じて見守ってくれた人の思いは、いつまでも私を支え続けるものになっていきます。そして、その時も一緒に寄り添ってくださっていた神様の温かさを後になって知りました。

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。』(ルカによる福音書7章13節)

(救世軍士官(伝道者))

私が五歳くらいの頃のことです。家で画鋸を使って工作をして遊んだ後、私は何かを思いついて外に遊びに行ってしまうました。そして家に帰ってきたところ、母親に真剣に叱られました。私の工作の片付けが不十分で、畳の上に出しっぱなしだった画鋸を妹が踏んでしまい、怪我をしてしまったのです。「どれだけ痛かったかわかるか? 自分が同じように踏んだらどんな気持ちになるか?」と大変な剣幕で叱られ、泣いている妹と、母親の言葉に、ただ「ごめんなさい」としか言えませんでした。私には、申し訳ないという思いと、今後は気をつけよう、そして自分が痛みを感じるように、他の人が感じる痛みというものを想像する思いが与えられました。妹も私も母にとって大切な子どもです。失敗をした私にも本気で向き合ってくれたのだと思います。

他者の痛みに共感するということを考える時、この経験を思い出すことがあります。

聖書は、神様が親のように私たちを大切に思っていること、また私たちの痛みを誰よりも知っていてくだ

私が、自分の生き方について悩んでいた時に、温か



日々喜ぶ者へと変えられて

眞鍋 勝利 さん (救世軍杉並小隊所属)

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

(聖書 コリントの信徒への手紙二 12章9節)

自分の力で生きていく、それは世の中では当然のこととされているかもしれない。力の足りなさ、弱さはマイナスのものと捉えられやすいものです。弱い自分に納得できず苦しむ時を経て、日々喜ぶ者へと変えられた眞鍋さんの信仰の証言です。

クリスチャンホームに生まれて 充実した学生生活

私は一九九〇年、三人きょうだいの末っ子として生まれました。私の両親は救世軍士官(伝道者)です。両親はいつも朝食前に家族でデボーションの時間をもつようにしていました。そのような環境で育ったため、神様の存在、聖書の話、それらはすべて身近なもので疑ったことはありませんでした。幼い頃から小隊(教会にあたる)に通い、何の疑いもなく信仰の道をスタートできたことは神様の深いお恵みだと思っています。

中学時代を大阪で過ごし、両親の転任で十六歳の時に大阪から東京に引っ越ししました。当時、東京の救世軍ではユース(青年)世代の人たちが主体的に活動していました。私がそれまで通っていた小隊では年上の方と関わるのが圧倒的に多かったため、同世代がいるこ

とに大きな喜びと衝撃を受けたのを覚えています。小隊で過ごすことが楽しくて私はその環境にすぐに溶け込んでいきました。小隊に自分自身の居場所ができたような気がして、ユースでの様々な活動も楽しくて仕方ありませんでした。

しかし大学に入學すると、私の生活はそれまでと大きく変わりました。在学中、開発途上国の子どもたちに教育支援をする学生NPO法人に所属し、学業がおろそかになってしまいうほど、その団体での活動に全力で取り組みました。

より良い活動をおこなっていくため、同じ思いをもった仲間と悩みながらも夜中まで議論し、周りからは頼られるような、自分にとってはとても心地良い環境でした。けれど、大学でクリスチャンの友人はおらず、大学での生活が充実すればするほど、私の心は大きく神様から離れていきました。夜中まで遊び歩くことも増え、人にはあまり話せないような悪い経験もたくさんしました。

自分の存在を喜べない日々

この頃から私は、小隊と学校で二種類の自分を使い分けるようになっていきました。自分の好き勝手に生きることは、当時の私にとってとても新鮮で楽しいものでした。しかし同時に、それ昔から私の中には、良いクリスチャンとはこうあるべきだ、という理想があり、その理想に近づく信仰生活を送りたいと願っていました。しかし、そのイメージは私の信仰生活をいつの間にか窮屈なものへと変えてしまったのです。いつしかそれに近づけない自分を裁くようになっていったのでした。そのため、私の目は神様ではなくいつも内側を見ていて、罪の中にある自分を責めていました。クリスチャンと言いながらも、なぜ自分はこんなに弱いのだろう、と自分の罪に目を

と同じか、またはそれ以上の罪悪感を抱えながら毎日過ごしていました。幼い頃から聞いていた「イエス様はこんな自分のために十字架にかかって死んでくださった」という言葉が、私の心の中に深く残っていたのです。



NPO 活動に力を注いだ大学時代



2019年、青年のキャンプで(左から2人目)

ら、いつか心が疲れ果ててしまふことは当然のことだったと思います。

小隊からも離れ、学校も休学し、うつ病診断を受け、半年間、何もしない療養期間を過ごしました。

療養期間中、本当に自分は信仰をもっていたのか、と深く悩みました。ユースの中で頼られ、自分個人が認められ、それが気持ち良かっただけではないか。周りから良く思われるために信仰をもっていたのか。こんなことで悩むならクリスマスチャンなんてならなければよかったのに、と思ったこともありました。

自分の周りにあるすべてのものが取り去られ、自分

の体裁を保っていたものがなくなると、まるで自分身の価値がなくなってしまうような虚無感に襲われま

した。今思うと、二十代前半の私は、必死に自分のアイデンティティを探していたのだと思います。自分は何者で、何のために存在しているのか。充実した大学生生活を送っている、コルネットが吹けてジャズ・スタッフ・バンドに所属している、小隊のユース世代の中心として活躍してきた……私が思いつくものはすべて時間とともに過ぎ去ってしまうものでした。自分の弱さばかりに目が留まり、自分自身に納得できず、自分の存在を喜べない毎日をご

弱さをもったありのままの姿で

卒業後、特に進路も決ま

っていない私に、神様は救世軍清瀬病院で働く道を与え、その流れで日曜日は再び小隊に通うようになりました。しかし、私の中で解決されていない悩みはずっと心の片隅に残り続けました。

二〇一七年七月、兄に誘われ「ナイトdeライト」というクリスマスチャンアートのライブに行った時、一つの曲に出合ったことで私の人生が変わりました。

「強さを誇らず」

今日も僕は考えてる 本
当に弱いままでもいいの？
自問自答の繰り返し 答
えがまたわからなくなる
ならば自分の弱いところ
僕自身もつと知るよう
に
辛く険しいこの坂道 弱
さ抱えたまま登るから

自分を偽って無理して
「強さ」手にしたって
真実の強さは身に着け
られないんだ
「だから僕らを背負った
あなたを誇ろう」

ありのままの姿で

弱さがあったって僕らの
存在に価値はあるし
弱さがあるから僕は輝
くん

「むしろ、僕は喜んで弱
さを誇ろう」
ありのままの自分よ輝け

それはコリントの信徒への手紙二 二二章をテーマにした曲でした。この曲を聴いた時、私がずっと悩んでいた、自分自身の弱さに対しての答えが明らかになった気がしました。自分の中にはどうしようもない弱さがある。でもそれは、自分が自分の力に頼らず、その弱さの中に神様の力が働かれるためだった。だから自分自身の弱さを責めるのは的外れで、何かを取り繕う必要もないし、背伸びする必要もない。弱さをもったありのままの姿で神様のものに飛び込めばいい、というメッセージを受け取りました。その曲を聴きながら私は涙が止まりませんでした。すべてが取り去られたあ

と、私の中に一つ残ったアイデンティティは「神様の子どもとして受け入れられている」ということです。何が私ではなく、私の存在自体を「極めて良か

喜び、祈り、神様に期待して

それまで私が大事に

自分で手放すことができなかったものを、神様は驚くべき方法で取り去り、その後ゆっくりゆっくりと時間をかけて、私を日々喜ぶ者へと変えてくださいました。今では、神様が用意してくださっている恵みを取り逃さないように、喜ぶことを意識的に選び取るようにしています。祈りつつ、自分自身が喜びを感じる道に進むようにしています。

現在、私は、救世軍本営(本部)のメディアチームで働いています。大学時代に培った動画編集の技術が活かされていることは感謝です。動画やメディアを通して、新しい形で神様の愛に触れる人が起こされるようにと、祈りつつ毎日を過ごしています。一度は手放した大学での経験が、こうして今用いられていることに



現在、メディアチームで働く

神様の計画の不思議さを感じます。

今までの人生を振り返ると、神様は必要な時に必要な訓練を与えてくださっていたと思います。なぜこのような辛い時期を過ごさねばならないのか、当時の自分だけが続け雲をつかむような思いでしたが、今振り返ると、すべてが必要だったことがわかります。これからも神様のご計画に期待し、喜んでチャレンジを受けていく人生を送りたいと願っています。

*2 救世軍本営付きのプラスバンド *3 聖書の創世記で、神が造られた世界をご覧になった時の場面に出てくる言葉

創立者 ウィリアム・ブース 大将 ブライアン・ペドル (万国本営 英国ロンドン)



世界をみつめて

〈英国〉万国本営での国際女性デーの取り組み

3月8日の国際女性デーにあわせ、英国ロンドンにある救世軍の万国本営(国際本部)では、世界中の救世軍に属する女性たちの信仰の証言をパネルにし、展示会を開催しました。「海の水位は上がっている、私たちも立ち上がろう」というテーマで、それぞれが人生



の困難を乗り越えて立ち上がった体験談が掲示されました。オンラインで内容を見ることができます。

URL: sar.my/iwd23-exhibition

〈カリブ海地域〉創立135周年記念集会

救世軍カリブ軍国は今年、創立135周年を迎え、2月23～26日に世界の

救世軍のリーダーであるブライアン・ペドル大将夫妻の指揮で記念集会をおこないました。この軍国はカリブ海地域にある16の国々から形成されており、本部はジャマイカのキングストンにあります。今回、135年前に初めて野戦(路傍伝道)がおこなわれた場所で、救世軍の信徒たちが証しのパレードと集会をしました。日曜日の記念礼拝には1,000人ほどの人々が集まりました。



救世軍の盲学校を訪問しました。この盲学校は1927年の開設以来95年にわたり、視覚に障害をもつ青少年のための教育



と社会参加を支援する働きを続けています。

〈グアテマラ〉教育支援

中央アメリカに位置するグアテマラの救世軍では、グアテマラシティの南部で6つの小学校とプレスクール(就学前の子どものための施設)を運営しています。学校があるメスキータル、リモン、コロニア・マヤなどの町は貧困と犯罪組織による暴力の危険が日常的にある地域で、学費を工面するのが難しい家庭も多いとのこと。現地の救世軍は、アメリカの救世軍の国際支援機関SAWSOとも連携し、学校を安定して運営し、子どもたちの教育の場を確保するだけでなく、保護者へのフードパントリーのサービスや家庭での学びの支援などもおこなっています。



救世軍とは? What is The Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置き、世界133の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、家のない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や子どもたちに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。



日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して、救世軍の働きが始まりました。日本人最初の救世軍士官となったのは山室軍平で、平易な言葉

で聖書のメッセージを伝えるとともに、廃娼運動や結核療養所の設立をし、日本の医療、社会福祉分野での先駆者の一人にも数えられています。

ブースや山室の精神は現代にも受け継がれ、各地の救世軍で、キリストの愛と救いを伝え、困難の中にある人々に寄り添い、奉仕する働きが続けられています。救世軍の世界のリーダーである大将は、最高会議という会議で選出されます。この会議には世界の救世軍のすべての軍国リーダーが集まり、祈りと礼拝を献げ、討議をし、数名の候補者を選出した中から投票によって大将が選ばれます。現在の第21代大将ブライアン・ペドルの引退に伴い、今年5月18日から英国で最高会議がおこなわれ、次期大将が選出されます。



救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円(税込)
クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。

日本司令官 スティーブン・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)